甲賀のたからを この先もずっと

～コロナ禍での歴史・文化の継承～

地域の伝統行事の今

市内には、先人から引き継がれてきた地域色豊かな祭礼行事や芸能などが現在も多く残っています。

毎年4月の水口曳山まつりで演奏される「水口囃子」、5月の油日まつりで5年に1回奉納される「奴振り」、瀧樹神社で奉納される「ケンケト踊り」など、地域の宝として、支えてきた方々の思いを今に伝えています。

こうした伝統行事は、五穀豊穣や子どもの健やかな成長を願い、地域の人々のつながりをより一層強め、地域を活気づけてきました。

一方で少子高齢化による踊り子などの担い手不足や、昨今の生活様式の変化、また新型コロナウイルスにより祭礼等を中止せざるを得ない状況など、継承していくためには多くの課題もあります。

そうした中で数々の伝統行事を地域の力で守っていこうと取り組まれている方々に歴史・文化の継承に向けた思いをお聞きしました。

黒川の太鼓踊り

鈴鹿の山々に囲まれ、田村川のせせらぎの音が心地よい土山町黒川地区。この地の大宮神社では、毎年4月の第3日曜日に、鬼の面を被った踊り子により太鼓や歌にあわせて地域の人々の手で守り、継承されてきた「黒川太鼓踊り」が奉納されます。

鬼の面と大きな太鼓が特徴

太鼓踊りの名前のとおり、大きな太鼓を打ち鳴らし雨乞いと五穀豊穣を願う地域伝統の踊りです。

当地区では上の平、中之組、川西、市場の約110戸が上組、下組の2つに分かれて、それぞれの歌や踊りを現在まで引き継いでおられます。

担い手不足が一番の課題

責任役員の谷口さんは「私が小学生の頃は学校での授業を終えた後、沿道での行列や神社での披露など、1日中踊りを見ていた記憶があります。

現在は若い世代が市外に転出しているので当日だけ地元に戻り、何とか踊りを披露できています。ライフスタイルの多様化や空き家も増加するなど人が少なくなり、踊りを支える人員を確保することが一番の課題です。

そうしたことから、5年前に今後10年間の方針を作成し、踊りに携わる担い手の年齢上限を70歳まで10歳引き上げることとしました。

今後、担い手が増えていくということは難しいので、外部からのボランティアや、踊りの好きな方を踊り子として迎えるなども今後は必要ではないかと考えています。

昨年度に続き2年間踊りを中止することになり、地域では毎年の披露を楽しみにしている方もおられるので非常に残念に思いますが、次回は実施ができれば良いですね。」

▲時代を超えて継承されてきた「黒川の太鼓踊り」

地域での集まりが減っているからこそ…

「例年なら実施していた地域での行事が減っているからこそ、こうした昔から引き継がれてきた伝統行事がより貴重に感じるのではないでしょうか。」と話されていました。

▲大宮神社 責任役員 谷口 修（たにぐち おさむ）さん／小さい頃の思い出も交えお話いただいた